

172回 花のお江戸を歩く会

寺町&超高級住宅街&名庭園散策

「有栖川宮記念公園～八芳園～上大崎寺町」

＜散歩道のご案内＞

寒い冬は都心の散歩が一番ですね。南麻布、白金、白金台、上大崎と続く今回の散歩道には有栖川宮記念公園、八芳園など都内でも有数の名庭園が魅力です。そして江戸時代から続く坂道沿いに各国大使館が立ち並んでいます。また散歩道全体が日本一と評判の超超豪華高級住宅街が連続し、その合間に江戸の名刹古刹が点在し、花のお江戸の散歩道の中でも歴史・環境・文化がそろった超A級のゴージャスな散歩道です。

＜散歩道の順路＞

東京メトロ日比谷線「広尾駅」出口1番改札前→有栖川宮記念公園T→南部坂→ドイツ大使館→広尾稲荷神社→広尾の庚申塔→新富士見坂→天現寺→青木坂→フランス大使館→新坂→光林寺（シュースケンゆかり）→五の橋→五の橋商店街→三光坂下T→専心寺→【ランチタイム】白金氷川神社→立行寺T（大久保彦左衛門ゆかり）→覚林寺（清正公）→明治学院T→瑞聖寺→八芳園（庭園散策）T→上大崎寺町【光取寺（横綱陣幕ゆかり）→清岸寺・月窓寺（坂東三津五郎ゆかり）→隆崇院（伊東深水ゆかり）→定光寺（福沢諭吉ゆかり）→戒法寺→本願寺→最上院】→目黒通→上大崎交差点→誕生八幡神社（目黒のサンマゆかり）→高福院（長谷川伸ゆかり）→JR・メトロ南北線・東急目黒線「目黒駅」解散

＜個別ガイド＞

① 有栖川宮記念公園T

都心にあるとは思えないほどひっそりとしています。日本古来の林泉式の景観と、起伏のある自然を生かした庭園です。もともと忠臣蔵で有名な浅野家の下屋敷があったところ。後に盛岡藩南部美濃守の屋敷になり、明治29年（1896）に皇族有栖川宮家の御用地に、大正7年（1913）には高松宮家の御用地なっていました。昭和9年（1934）1月5日、有栖川宮威仁（たけひと）親王の二十周忌のご命日に公園用地として賜与され、東京市は同年11月17日公園として開放しました。現在は港区立の公園で、広さは約67560平米、敷地内には都立中央図書館、麻布運動場もあります。近くには南部坂、木下坂、盛岡グラウンドの名が残り昔を偲ばせています。→南部坂→ドイツ大使館

② 広尾稲荷神社

慶長年間（1596～1615）、徳川二代将軍秀忠公が鷹狩の際、この地に稲荷を勧請したと伝えられる。当社は、麻布宮村の千蔵寺が別当であったため千蔵寺稲荷とも呼ばれていたが、明治42年2月22日、廣尾稲荷神社と改称した。社殿は木造神明造で、拝殿は弘化4年（1847）、青山火事と呼ばれる火災にて焼失し再建した当時の建物で、本殿と幣殿は関東大震災の後、

大正 14 年に建てられたものとなる。昭和 15 年、紀元 2600 年記念事業として氏子崇敬者の寄進により、境内整備が行われ、このときに三基の庚申塔を社殿裏側道路に面した現在地に移転した。拝殿天井には龍が描かれており、これは日本洋画家の先駆、高橋由一画伯の日本画最後の大作で、港区指定文化財となっている。

③ 広尾の庚申塔

庚申信仰は、庚申の夜に人の体内に住む三尸虫が、眠っている間に体内を抜け出して、天帝にその人の罪科を報告して生命を縮めるといわれているため、眠らずに一夜を明かすもので、講の形をとって地域住民の交際の場となっていました。庚申塔は庚申信仰を具象的に表現する塔で、室町時代後期以降盛んに各地に建てられました。

広尾稲荷神社の本殿裏手の道路に面したところにある 3 基の庚申塔は、方形角柱の笠塔婆型で、塔身が太く、堂々としています。社伝では広尾稲荷神社の別当寺であった千蔵寺の住持祐道の代に、講の人々の浄財を得て建てられたといわれ、3 基のうち、中央には元禄 3 年(1690)、左には元禄 9 年の年号があり、右は摩滅のため年代不詳ですが、状況から左の 2 基よりも古い可能性があります。庚申信仰が全国的に盛行している時代の産物であり、この地域も例外ではなかったことがわかります。

庚申信仰の実態は、この地域ではすでにほとんど失われ、過去の組織の状況を伝えるものも全くありませんが、さまざまな要素を合成しながら、神道、仏教などと異なり、政策的な指導援助等もないまま、自主的な民間信仰として、庶民の間に行われてきたものであり、都心化したこの地域での、かつての信仰のあり方を想起させる遺物として、塔は貴重な存在となっています。現在は広尾稲荷神社の境内管理下にあつてよく保存されています。

→新富士見坂

④ 天現寺

当寺は、たまたま小日向御簗筋町にあった臨済宗大徳寺末の普明寺を引継ぎ享保四年(1719) 現在地に移築して多聞山天現寺と改め、新たな法幡を竖起することとなった。当寺は八代将軍古宗公を初めとして代々将軍家の御成があり、広尾の毘沙門堂として人々の信仰を集めていたが、弘化二年(1845) 江戸大火に類焼した。その後、八世中興古道和尚は茶禅一味の教法にて信徒を教導し、除々に諸堂宇の復興をされ、九世輝道和尚の頃より檀徒の数も時勢につれて増えて来るようになった。

庭の築山の麓に芭蕉句碑がある。『一里はみな花守の子孫かや』。ばせを。この句碑の裏に文政六癸未初冬『其薫四方に満つるや八重桜』。ともある。恐らくその頃当寺に有名なしだれ桜があったと記録されているが、それにちなんで文政の頃ここで句会が催され句碑が立ったのではなからうか。→青木坂→フランス大使館→新坂

⑤ 光林寺(シューズケンゆかり)

延宝 6 (1678) 年に麻布市兵衛町に建立され、元禄 7 (1694) 年に現在地に移転。安政 3 年 (1856) 7 月ハリスとともに下田に着き、その片腕として日米修好通商条約締結交渉に活躍したオランダ人ヒュースケンのお墓があります。アムステルダムで生まれたヒュー

スケンは渡航先のアメリカで、ドイツ語、フランス語等も出来る語学力をハリスにかわれて日本に赴任しました。陽気で闊達な気質と日本の国情に精通した見識で、江戸に滞留する外国人の間で知名士でしたが、プロシア使節と日本側との通訳として通っていた赤羽接遇所からの帰り道、中の橋のたもとで刺客の一団に襲われました。1860年12月5日、享年28歳でした。→五の橋→五の橋商店街→三光坂下T

⑥ - 1 三光坂

本来は坂下専心寺にあった三葉の松にもとづき三結(さんご)坂だったというが、別に、日月星の三光などともいう。

⑦ 白金氷川神社

白金の総鎮守。白鳳年間の創建とされる。また、景行天皇の御代、東国平定を命じられた日本武尊は深く素盞鳴尊を崇敬し、日々、この地から武蔵国一宮の氷川神社を遙拝し、その加護を祈って、無事大任を果たしたとも伝えられる。

明和9年(1772)目黒行人坂の大火により社殿が焼失、宝暦2年(1752)権現造の社殿が再建された。しかし、昭和20年(1945)の東京大空襲の戦禍に遭い、現在の社殿は同33年(1958)に造営されたものである。京都あたりの神社を思わせる、東京ではちょっと珍しい社殿である。末社の建武神社は、後醍醐天皇・護良親王・楠木正成をはじめとする南朝の忠臣を祀っている。

⑧ 立行寺T(大久保彦左衛門ゆかり)

立行寺は、旗本の久保彦左衛門によって創建され、別名大久保寺と呼ばれています。大久保彦左衛門、徳川家康から家光まで三代に仕えた旗本で、晩年は徳川家と大久保家の歴史を交えて武士の生き方を子孫に残した家訓書「三河物語」を書き著します。

大久保彦左衛門は、講談などで「天下のご意見番」として知られています。旗本以下の輿が禁止された際に「大だらい」に乗って登城したり、将軍・家光にことあるごとに諫言したなどの逸話がありますが、どれも創作された話です。しかし反骨精神に富み、多くの浪人たちを養って就職を世話するなどして人々に慕われていたのは事実だそうです。

立行寺には大久保彦左衛門の墓とともに、講談などで登場する「一心太助」(架空の人物)の墓もあります。

⑨ 覚林寺(清正公)

寛永8年(1631)日延上人が開山した日蓮宗の寺。加藤清正の位牌を置き、江戸時代から「白金の清正公さま」として親しまれています。日延は李氏朝鮮第14代国王宣祖の長男、臨海君の子であり、文禄・慶長の役の際に加藤清正によって日本へ連れてこられた人物であった。毎年5月4~5日の清正公大祭には、葉菖蒲の入った「勝守」が頒布されます。これは武運の強かった清正公にあやかり「勝負に勝つ」と言う意味が込められており、当日は境内から天神坂上までたくさんの夜店が並び賑やかです。山手七福神の一つ、毘沙門天を祀る寺でもある。

⑩ 明治学院T

ジェームス・カーティス・ヘボンが横浜に開いた「ヘボン塾」を起源とする日本最古のキリスト教主義学校（ミッションスクール）。明治から大正にかけて建築された建物が残されて文化財に指定され。歴史的な景観が魅力的である。（明治学院礼拝堂＝港区文化財、明治学院インブリー館＝国の重要文化財）

⑪ 瑞聖寺

瑞聖寺は寛文10年（1670年）に創建された。開山（初代住持）は日本黄檗宗2代の木庵性瑫である。木庵は日本黄檗主の祖・隠元隆琦の招きで明暦元年（1655年）に中国・明から来日し、寛文5年（1665年）に江戸入りした。開基（寺院創設の経済的基盤を提供した人物）は摂津麻田藩（大阪府豊中市）の2代藩主・青木重兼である。重兼は黄檗宗に深く帰依し、晩年には家督を譲って出家している。江戸時代には江戸の黄檗宗の中心寺院として「一山之役寺」と呼ばれていた。大雄宝殿および通用門1棟は昭和59年（1984年）東京都指定有形文化財に指定され、平成4年（1992年）に国の重要文化財に指定された。

⑫ 八芳園(庭園散策)T

江戸時代前期には譜代の江戸幕府旗本・大久保忠教（彦左衛門）の屋敷であったが、その後薩摩藩の抱屋敷、島津氏（松平薩摩守）の下屋敷を経て、明治時代に渋沢喜作の手に渡る。1915年（大正4年）、実業家・久原房之助（日立製作所創始者）の邸宅時に現在の建物と庭園が整備された。戦後久原（当時公職追放中）は、銀座や築地で料亭などの経営を手がけていた長谷敏司に、海外からの旅行者（賓客）向けに、日本庭園を生かした本格的な料亭の共同経営を持ちかけ、自ら「八芳園」と命名し1950年（昭和25年）に創業した。数年後全面的に長谷側の所有となり、経営が本格化した。

⑬ 上大崎寺町

品川区上大崎の寺町。寛政の頃に増上寺の子院が移転して寺町が出来たところで、9ヶ寺が立ち並んでいる。→光取寺（横綱陣幕ゆかり）→清岸寺・月窓寺（坂東三津五郎ゆかり）→隆崇院（伊東深水ゆかり）→定光寺（福沢諭吉ゆかり）→戒法寺→本願寺→最上院→目黒通→上大崎交差点

⑭ 誕生八幡神社(目黒のサンマゆかり)

文明年間（1469年～1487年）に太田道灌が夫人の懐妊にあたって、筑前国（福岡県）の宇美八幡をこの地に勧請したものとされています。無事に男の子が生まれたことから「誕生八幡」と呼ばれ、安産の守り神とされている9月中旬に行われる「目黒のさんま祭り」はこの神社を中心として行われる。

誕生八幡神社の鳥居をくぐって階段を登ると、左側に小さな社殿があります。この社殿は「重箱稲荷」と呼ばれています。昔、重箱稲荷はこの近くの六軒茶屋町（現在の上大崎二丁目）にありましたが、明治四十二年に誕生八幡神社へ移されました。「重箱稲荷」とは不思議な名前ですが、その由来には次のようなお話が伝えられています。

三代将軍徳川家光がこのあたりへタカ狩りに訪れた時のことです。「獲物をつかまえるな

ら今じゃ!」。将軍がそう思ったとき、大空高くタカが放たれました。しかし、どうしたとか、タカは獲物には見向きもせず、はるかかなたに飛んで消えてしまいました。「どこへ行ってしまったのじゃ……?」。将軍も家来の武士たちも、途方にくれてしまいました。タカがいなくなってしまうとは、どうにも狩をすることはできません。

がっかりしていたところ、将軍は道ばたにひっそりと建つ小さな稲荷神社を見てハッとひらめきました。持ってきた重箱のお弁当を稲荷社におそなえしようと考えたのです。

「タカよ、戻ってまいれ……」。将軍がいっしょうけんめいお祈りしていると、不思議なことにタカがどこからともなく戻ってきたのです。とても喜んだ将軍は「狩り続けるぞ!」と帰ってきたタカを連れ、再び出かけて行きました。

この重箱はそのまま社殿にそなえられ、稲荷社の宝として大切に守られました。このことから「重箱稲荷」という名前と呼ばれるようになりました。

⑮ 高福院(長谷川伸ゆかり)

弘法大師は高野山を開創された際、鎮守として、各処に弁天さまを祀られました。高野山が疲弊して、一山に資糧が乏しくなった時、弁天さまが、宝舟を引いて来て山徒に与え給うたことから、その高福にちなんで高福院が建立されました。

寛永のころ、松平讃岐守侯が、当地に下屋敷(現在の自然教育園・庭園美術館)を造営されるにあたり、讃岐(香川県)が生んだ偉人である弘法大師の御寺を建立せんとして、高野山に要請しました。

そこで高祖院の良尊和尚が、高福院の寺名と舟引きの弁天さまを奉持して東上したのが、今日の当院の起源です。舟引きの弁天さまは、幾度かの火災を乗り越えて、秘仏として本堂内に祀られています。

現在の本堂は、天保の改革を断行した水野越前守忠邦侯が、千駄ヶ谷穩田の屋敷内に建立し、自ら勤念を凝らしておられたお堂で、天保十五年(1844)第十三世恵玉和尚が拝領して移築したと伝えられています。

昭和五十八年、弘法大師御入定千百五十年御遠忌を記念して、檀信徒の協力を得て、百四十年ぶりに本堂に大改修の手を加え、高野山より森寛紹管長猊下の御親修を仰いで落慶記念御遠忌法要を厳修しました。→JR・メトロ南北線・東急目黒線「目黒駅」解散